ふるさと散歩道 第二四〇回

間部詮勝の時代（十八）

― 中山法華経寺の碑文 ―

旧幕府要人として多くを語らず、一切の言い訳をしなかった詮勝公。その墓碑には旧幕府関係者たちの詮勝公に対する思いが刻まれています。

詮勝公亡くなる

明治十七年（一八八四）十一月二十八日、間部詮勝公は東京下谷車坂の屋敷で八十一年の生涯を閉じました。同三十日付けの読売新聞には「浅草の妙音寺で葬儀を行うので、旧知の方々にお知らせする」という小さな記事が掲載されており、おそらく旧幕府関係者や東京近辺に住む旧藩士たちが参列したものと思われます。

ところで、江戸（東京）における間部家の菩提寺は浅草の九品寺（浄土宗）でしたが、なぜ日蓮宗の妙音寺で葬儀が行われたのでしょうか。この後、詮勝公の遺歯髪は九品寺に納められますが、遺骨は同じく日蓮宗の大本山である中山法華経寺（千葉県市川市）に納められています。この中山法華経寺の法主日亀が、妙音寺での葬儀を執り行ったと伝えられており、当時の間部家と日蓮宗との強い関係が推定できます。

間部詮勝公の墓碑
（千葉県市川市　中山法華経寺）

墓碑の銘文

詮勝公の遺骨が埋葬された中山法華経寺には、明治十九年に詮勝公の遺徳を偲ぶ墓碑が建立されました。以下、その碑文を要約します。

間部松堂翁墓

「これは越前鯖江城主間部下総守の墓である。（中略）その人柄は物事に動じず清廉で、意志が強く他に迎合することがなかった。文武に精通し、特に書画に優れた。（中略）徳川家斉・家慶・家定・家茂という四代の将軍に仕えること実に四十五年に及び、その言説は常に正しく力を尽くして任務を遂行した。その功績は大きく、後世に伝えるべきことは数多いはずだが、当時の幕府や朝廷に関することは秘密事項であるため、いまその詳細を知ることができないのは誠に残念である」

この石碑の「間部松堂翁墓」を篆額した元津山藩主（岡山県）の松平確堂は、徳川幕府崩壊後の徳川宗家継承者である徳川家達の後見人となった人物で、碑文の文案を作成した元老院議官の中村正直は元幕臣です。つまり、旧幕府あるいは徳川家に関係の深い人物たちによって詮勝公の墓碑が建立されていることが分かります。

晩年の詮勝公

そして、この碑文の文字を書いたのが中山法華経寺の日亀です。日亀は晩年の詮勝公について次のように記しています（墓碑の最後に引用されている）。

「間部詮勝公の功績や罪科について、世間の評価は両方が入り混じっているが、今さらそれらを比較しても仕方がない。いま詮勝公はゆったりと、物を書いたり絵を描いたりして、心の中の憂いを払い、年齢が八十歳を超えてやっと大きな幸せを受けていた」

激動の幕末を生きた詮勝公。旧政府の関係者として、晩年は多くを語らず、「回顧録」の類も一切残しませんでした。ただ書画の世界に没頭し、ひっそりとその生涯を終えたのです。

（文化課　前田清彦）

【用語解説】
中村正直（一八三二～一八九一）教育家・思想家で、福沢諭吉らと明六社を結成。スマイルズの原著を翻訳した『西国立志編』の著者である。

広報さばえ
No.749 November 編集・発行
鯖江市役所情報広報課　鯖江市西山町13-1
〒916-8666 TEL.0778-53-2203 FAX.0778-51-8161